

今を 読み解く

編集委員
藤巻 秀樹

今秋来日したフランスの思想家、ジャック・アタリ氏は個人主義による人口減少が国家の衰退を招くと指摘、日本の活力維持には移民の受け入れが必要と訴えた。産業界や政界の一部にも将来の労働力不足を補うためにもっと外国人を活用しようとの声がある。今後50年間で約4千万人が消えるという急激な人口減少にどう対応するのか。移民問題の議論をいつまでも避けては行かない。

移民という言葉は聞くけど、日本人の反応は大きく2つに分かれる。1つは犯罪が増え治安が悪化するから絶対ダメという意見。もう1つは主に経済的な理由から大量に受け入れるべきだとの積極論だ。前者は労働力や内需の拡大、異文化交流などプラスの面を見ようとしなが、後者にも問題がある。移民を安価な労働力としか見なせず、受け入れに必要な社会的コストを無視する人が多いのだ。まず重要なのは外国人が集中的に住む地域で何が起きているのか、その現状を知ることだろう。

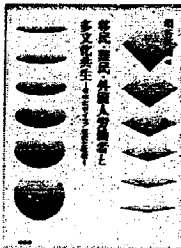
●外国人4割の街も

稲葉佳子著「オオクホ 都市の力」(学芸出版社・2008年)を読むと、アジア系外国人によって東京・大久保がここ十数年でいかに大きな変貌を遂げたかに驚かされる。JR新大久保駅周辺に住む外国人の比率は今、4割に迫る勢い。韓国、中

国、タイ、ベトナム、インドなどの飲食・食料店や外国人経営の旅行会社、ホテル、書籍・C

国家の針路問う移民問題

D専門店、美容院が軒を連ね、昼夜を問わずにぎわっている。エスニック街が今日の隆盛を迎えるまでには住民との様々なあつれきがあった。生活習慣の違つ日本人からすれば、それは「多文化共生ではなく多文化強制だった」。だが、異文化との



接触を通じ、日本人も次第に慣れていく。当初は外国人お断りだった不動産業者も今は歓迎だ。外国人との共生で日本人自身も変化することが分かる。

杉山春著「移民環境」(新潮社・08年)はかつてブラジルに移民として渡った日本人の子孫がデカセキとして日本に戻り暮らす姿を描く。現在日本にいる日系ブラジル人は約30万人。派遣労働者として製造業を末端で支える存在だが、その裏で様々な問題が生じている。多くの人は

として活用するなら、日本語教育の充実や児童の教育支援などきめ細かい対策が必要だろう。移民問題について幅広く知りたい人にお薦めなのが、川村千鶴子ほか編著「移民政策へのアプローチ」(明石書店・09年)

だ。研究者に加え、非営利組織(NPO)や企業で実際に外国人支援活動をしている人が執筆。出産から育児、教育、就職、結婚、住まい、老後などライフサイクルの各段階に及ぶ多様なテーマを取り上げている。

●ドイツの例参考に

今年1月、内閣府に定住外国人施策推進室が設置された。だが施策の中心は日系人の就労支援で、将来を見据えた移民政策はまだ検討もされていない。その点、戦後の高度成長期に外国

人材開国か鎖国か

人労働者を大量に受け入れた欧州は様々な経験を重ね、先行している。増谷英樹編「移民・難民・外国人労働者と多文化共生」(有志舎・09年)は日本とドイツを比較しながらドイツがなぜ移民受け入れ国に転換したかを分析しており、参考になる。

これまで在日外国人に絡む問題は専ら地方自治体や地域住民、NPOに委ねられてきた。だが、地域レベルでの対応は限界にきている。移民を本格的に受け入れるかどうかは、実は将来どんな国を目指すのかという国家像にかかわる大問題だ。人材開国で成長を続け経済大国の地位を守るのか、人材鎖国のまま少子化対策に専念するのか。それとも人口減を受け入れ小国として生きるのか。どの道を選ぶにせよ、国家レベルの戦略と国民的議論が求められている。



外国人が集中的に住む地域の現状を知ることが重要だ。イラスト・よしおか じゅんいち